

「この人に聞く」成熟社会と建築

香山 壽夫 氏



プロフィール：1937年東京都生まれ。(有)香山壽夫建築研究所所長。東京大学名誉教授，工学博士（東京大学）。1960年東京大学工学部建築学科卒業，1966年ペンシルベニア大学美術学部大学院修士（M. Arch）。東京大学においては吉武泰水に，ペンシルベニア大学においてはルイス・I・カーンに師事した。1971年東京大学助教授を務める傍ら香山アトリエ／環境造形研究所（現・香山壽夫建築研究所）を設立。1986年東京大学教授。退官後，1997年明治大学教授，2002年より5年間放送大学教授を務める。公共建築，教会建築，学校建築の設計を多く手掛けることで知られ，村野藤吾賞（1995），日本建築学会賞作品賞（1996），日本芸術院賞（2005）ほか受賞多数。著書に『建築意匠講義』（東京大学出版会），『建築を愛する人の十二章』（左右社），『人を動かす設計術』（王国社）など多数。

（前文）

建築家香山壽夫氏に、建物の保全再生から都市デザインに至るまで、幅広く伺った。

■建物の保存再生に関わる起点

僕はアメリカから帰国後しばらく九州芸工大にいた後，1970年代の初め東大に戻ったのですが，当時，東大は移転の話題で持ち切りでした。東大は都心にいるべきじゃない，郊外に移れと，大学全体で移転を計画していました。候補地が，幕張，立川基地跡などいくつもあり，先輩の都市計画の先生方は東大本郷キャンパスをすべて移すというプランを盛んに練っていました。単に移転して拡大する目的だけでなく，高度成長に応じて，古い建物をどんどん壊して新しい建物にして欲しいという要求，さらには，跡地をもっと高度に利用したいとか，様々な力の下で移転計画が進んでいたのです。

そのときに建築史の稲垣栄三先生が，「大学というものは，そんな簡単に壊すものではない」とひとり声を上げられた。僕もその考えに強く賛同した。古いか

らといって何でも壊してしまうと、大学は、大学でなくなる。なぜなら継続しているものを母体にして新しいものが生まれてくる、それこそが大学の本質だからです。欧米の名門大学も引き合いに出しながら、古い建物をきちんと大切に使うていくことを訴えたのです。しかし、当時周りからの反応は、「大学は進歩して発達するところ、古いものは壊して新しくするのが現代というものではないのか」といった冷たいものがほとんどでした。

ちょうどその頃、最初に建替え予定だった工学部6号館の予算が足りず、建て替えることが難しくなって、なんとか屋上に増床できないかという話になりました。「保存再生」の最初のチャンスが回ってきたのです。僕が考えた6号館改修のコンセプトは、既存の建物（内田祥三設計）はこれで様式として完成しているから、これは尊重した上で、調和がとれ、かつ現代的な新しいものを屋上につくるというものでした。1975年に完成した時は、「新しいけど確かに似合っている」と率直な評価を受け、建築専門誌でも、なるほど保存再生というものは大切な概念だという認識が高まりました。これを出発点として東大工学部再開発計画へとつながっていき、横浜税関本関の保存改修設計もその延長上にあります。もし稲垣先生が勇気を持って訴えていなかったら、全然違う結果になっていた。稲垣先生には本当に感謝しています。

■様々な保存再生プロジェクトを通じて

建物は時代とともに機能や使われ方が変わり、周りの都市的な環境も変わります。機能、使われ方が新しくなる。これは建物が持つ基本性質の一つです。横浜税関本関の場合は、それがとりわけ大きく、市民のための新しいはたらきを持つものにすることが求められました。昔の税関よりはもっと市民に対して開けたものにする、港に遊びに来た人がそこで憩えるような様々な空間をつくるということで、建物の形状や特徴を生かしながら、市民が入りやすいように変えました。

正に国の玄関といったモニュメンタルなものでもあるし、通常の建物にはない機能を備えていて、それを市民のものへと大きく変換する設計だったのが面白かった。だから、かなり思い切って直さなくてはいけない。基本的に外観は保ちながら、中に入ると、バツと変わるようにすることがコンセプトでした。つまり、維持復元するところと、思い切って直して新しい形にするところをしっかりと区別してとらえること、中途半端に似たようなものにするのは一番いけない。直すならきちんと元のように復元し、そうでなければ現代のものにする。そういうことが初めて意識的にできるようになったのが、この横浜税関本関の保存再生でした。この頃から、歴史的な建物を保ちつつ、新しい要素を加えていくという、建物の保存再生をいくつか続けて手掛けることになりました。

近年では、京都会館（現・ロームシアター京都）という京都市の中心となる劇

場の保存再生があります。京都会館は、1960年に建築家前川國男によって建てられた戦後の日本近代建築を代表する作品であったため、これを壊す壊さないで市民の大論争になりました。そのままでは不便で使えない建物なので、京都市は残す決断をしましたが、しかし、元の建物の特徴を残しつつそれを新しくして使えるようにすることは容易なことではありませんでした。東大や横浜税関みたいな様式的な建物と違って、近代建築には様式的なディテールが判然としていないからです。しかし、前川さんの設計は、コルビュジエを基にした自分のスタイルがありますから、それを尊重しながら外観は保って、大ホールを全部新しく作り直しました。また、老朽化や損傷で強度が落ちていた箇所の補修・補強をすることといった技術的工夫、あるいは、昔は吹きさらしで寒々としていたバルコニーをカーテンウォールで包み、みんなが集まる空間に変えるといった空間の作り直しの工夫など、様々な方法の組み合わせで出来上がっています。

古い建物に対して市民の意識は、昔は壊せ壊せ、でしたが、今は壊すなど正反対になりました。京都会館の保存再生設計でも前川先生の大傑作をいじるとは何事だと、随分叩かれて大変でした。しかし、残すためには、使えるように直さねばならない。僕も確信を持って取り組みました。古いホールはほとんど使えなくなっていた。そんな使えない建物を公共建築として残しておいては、それこそ税金の無駄遣いです。京都市も、保全という考え方をしっかりと持っていて、終始僕たちを支えてくれたので、本当に感謝しています。

こうした近代建築の保存再生をいくつか手掛けましたけど、これは、そのひとつの集大成と言えるものです。そして設計だけでなく、市民の意識の変化に対する対応の仕方もまた、自分なりに苦しみながら取り組んだ例です。

■都市デザインにおける公共建築，そして保全

2002年から放送大学で都市デザインについて講義を行うことになりました。市民に関心があることのひとつが都市や町並みだと放送大学から誘われ、僕も都市デザインをもう一度勉強し直すよい機会だと思い、お引き受けしました。改めて、この分野の本を読み返し、国内外の町を回って見て、自分の勉強としても面白かった。世の中の関心が町並みや古い建物のよさに向き始めていた時だったのでしょう。反響が大きく、視聴率も高かった。たまたま入った寿司屋の板前やタクシー運転手などからも、思いがけない感想を聞かされるといった具合で、東大で何年も授業をやっているにもかかわらずこんな反応は受けたことがなく、放送大学ならではの手応えがありました。その後、建物の保存再生をやる時に自分の見方も広がりましたし、法律や制度の仕組みだけを論ずる都市計画論ではない、生きている町の空間を扱う新しいきっかけにもなりました。

建物は生きた環境の中で育つものです。森と同じで、森の木は1本で生きているわけではなく、ほかの木と一緒に育って、それらが安定して森になっている。

町並みも建物もそういうものです。ですから、直したり、手を加えたりするにも、常に周りのことを考えなくてはいけない。あるいは、周りがあって建物ができていることを意識しなくてはいけない。これこそが都市デザインです。僕たちの生きている都市は、自然の森や林や野原と同じように、昔から様々入れ替わりながら育ってきて今の美しい町並みになってるわけです。専門家がいろいろ難しいことを言う以前から、そうなっていたのだから、理屈以前に、人間には本来、建築はみんなで作るものという意識がなくてはならないと改めて思います。そうすると、正に1個1個の建物の保全と、都市のデザインというものは同じ、ひとつにつながった概念だということが分かってきます。

また、みんなが暮らしている町、その町を構成している建物そのもの、お金の出所で公共建築とプライベートな建築とに区別されたとしても、みんなが生きている空間をつくっているという意味では、どの建物にも差はないのです。みんなの住んでいる空間を使って建物を建てているわけだから、みんなのものという意識がなければ建築はつくってはいけない。そう考えると、建築はある意味すべて公共建築と言えます。それが公共建築という概念の根本だと思っています。

建物は長く使うことが大切です。これは経済的な意味も含め理由は様々です。しかし、ただ保存して残しておきさえすればいいというものではありません。生きている町にあるものは、みんな生きて使っている。生きて使っている上で大事なことは、絶えず変わることです。僕が建物の保存再生で一番注意しているのは、歴史的建物を保存することに固執して、変えてはいけないという考えに陥ってしまわないことです。そうってしまうと建物は死にます。建物は生き物ですから、使ってこそ生きるのです。だから、常に変えなくてははいけない。歴史的な価値という固定的な考え方で、建物を骨董品のように保存するのは、一見建物を大事にしているようですが、実は建物を殺す危険なことなのだと思います。

保全という言葉は、正に「全」。完全、安全という、全きものを保つ、つまり建物の全体性を守ることを意味しています。生きて使う建物を長く維持していくためには、絶えず手を入れないといけないのです。つまり、保全とは「変えるな」ではなく、「うまく変えよ」ということでなくてはならない。いかにうまく変えるかが大切なのです。

それには、今ある建物に対する敬意がないといけません。古い建物はいい建物だと認めて、大切に作る気持ちで取り組むことです。それが結局、保全という考えに返ってくるのです。全きものを常に保って建物を生かし続ける。木がいい例です。木は成長して形を変えていってもきれいでしょ。どの段階でも、木は一つの「全き」の形をしているからです。若木は若木で美しく、老木もまた枝が据わってきて美しい。「保全」とは、正に、生命の全体を保つということに他ならないのではないのでしょうか。